

## 8. その他の動物

### その他の動物 概論

その他の動物では、陸産及び淡水産の無脊椎動物のうち、昆虫類を除く分類群を扱った。ただし、淡水域に確認される種であっても、産卵が汽水や海水において行われるとともに淡水への依存性が低い種については、今回は浅海域の生物として扱った。

今回のレッドデータブックの見直しにおいては、2009年発行の改訂版において扱われたクモ類（節足動物門クモ形綱）とミミズ類（環形動物門ミミズ綱）に加えて、淡水産エビ類（節足動物門軟甲綱）を取り上げた。

### 1. 石川県のクモ類について

石川県におけるクモ類相についての報告は、徳本（1990, 2006, 2009）や高（1988）、富樫・高（1988）などが見られるが、最近のまとまった報告は見られず、石川県におけるクモ類相の研究は十分には進んでいないものと思われる。そのような事情から2009年の改訂版以降の新情報が得られていないため、ほぼ2009年版の記載を踏襲し、以下簡単に述べることとする。

石川県には400種程度のクモ類が生息することが判明している（新海・他、2018）。本県全域のクモ類の構成としては、日本固有種および中国東部・韓国分布種、世界広域分布種を併せたものが85%程度を占めている。その他、旧北区・全北区系を併せた北方系が12%、南方系といわれる東洋区系が3%含まれており、典型的な日本中部温暖帯系クモ相となっている（徳本、2009）。

### 2. 石川県のミミズ類について

石川県におけるミミズ類相に関するまとまった研究が見当たらないことから、石川県のミミズ類相について概説することは困難である。石川県のミミズ類に焦点を当てた調査・研究は、ハッタミミズについては例外的に行われており、特に本種の分布域に関しては、ある程度の情報が集積している。

石川県内では河北潟周辺からハッタミミズが確認されており、詳しい本種の分布域を示した文献としては、80年以上前に、市村・安田（1931）が行った石川県天然記念物調査における記録がある。これによると、旧弥勒縄手村（旧森本村、現金沢市森本町）、旧小坂村（現金沢市小坂町）、旧河北郡乙丸（現金沢市乙丸町）、旧神谷内村（現金沢市神谷内町）を南の境界域として、河北潟の東岸に沿うエリアを分布域とする図を掲載している。高橋ら（2019）では、市村・安田（1931）が示した分布の南端部分である乙丸町や小坂町からはハッタミミズは確認されず、それよりやや北の沖町までの確認となっている。一方、西側の分布としては、市村・安田（1931）が柳橋川下流域の右岸側（東側）までを示しているのに対して、より西側を流れる金腐川やさらに西側の浅野川の下流部左岸側（西側）からもハッタミミズが確認されたことを示した。これらが1930年代以降に広がったものかどうかは明らかではないが、川をいくつか跨いで、この80年間で分布を拡大したと考えるよりは、もともとの本種の分布域が市村・安田（1931）が示したものよりは広がったものと考えるのが妥当であろう。本種の河北潟周辺における南側の分布は、高橋ら（2019）によりその詳細が明らかとなっているが、北側の分布範囲については未解明のところが多いが、高橋ら（2012）は、河北潟の東岸から北岸に至る複数地点でハッタミミズの生息を確認しており、分布の北端がかほく市まで及ぶことを示している。また、渡辺・南谷（2014）も、津幡町やかほく市においてハッタミミズが確認されたことを報告している。

なお、本種の和名表記を2009年度版ではハッタジュズイミミズとしたが、改定にあたり環境省のレッドリストの表記に倣いハッタミミズとした。

### 3. 石川県の淡水産エビ類（軟甲綱）について

石川県の淡水産エビ類（軟甲綱）についてのまとまった記録や調査は不十分であり、本県の淡水産エビ類相については未知の部分が多い。一部の種について、分布記録等が報告されているものがあり、これらに基づいて概説を試みる。

軟甲綱に含まれる種群は、甲殻類の2/3を占めており、多様な分類群を含んでいる。このうち、エビ目に含まれるコエビ類（コエビ下目）については、今井（2012）および丸山（2017）において、能登地域に生息するもののおおよそが明らかとなっており、これらによると能登地域には9種の淡水産コエビ類が生息し、そのうち、トゲナシヌマエビ、ヒメヌマエビ、ミナミテナガエビとヒラテナガエビについては、最近になって定着した可能性が指摘されている。

ワラジムシ目では、内灘砂丘由来の湧水で確認されたコツブムシ類について、福原（2016）によりチョウセンコツブムシと同定されており、県内の他の地点から確認されているコツブムシ類も本種の可能背が高いものと考えられる。

淡水産ヨコエビ目については、県内からは、ホクリクヨコエビとヤマトヨコエビの生息が知られているが、石丸（2011）により、七尾市からタキヨコエビが確認されたことが報告されている。

今回、大型鰓脚類（ハウネンエビ目、カブトエビ目、カイエビ目、タマカイエビ目）についても、レッドリストの対象種群として取り上げたが、これらの多くは、汎世界的な広域分布種が多く、地域性は低いものと思われる。日本における大型鰓脚類相は長縄（2001）により8科8属11種が挙げられている。

### 4. 種の選定基準

クモ類については、改訂版（2009）以降の研究についての情報がほとんどないことから、改訂版の掲載種について、現状を把握することに務めた。

ミミズ類については、改訂版（2009）において取り上げられたハッタミミズを取り上げ、その後の調査データに基づいて再度評価した。

淡水産エビ類（軟甲綱）については、県内に生息する淡水産コエビ類、淡水産ワラジムシ目、淡水産ヨコエビ目、大型鰓脚類を対象として、主に現地調査により現状の把握を行い、できるだけ環境省レッドリストカテゴリーと判定基準に従って選定を行った。

### 5. 選定結果とその概要

以下の11種を選定した。

|        |   |
|--------|---|
| 絶滅危惧Ⅰ類 | ハッタミミズ                                    |
| 絶滅危惧Ⅱ類 | イソコモリグモ                                   |
| 準絶滅危惧  | キシノウエトタテグモ、キノボリトタテグモ、ワスレナグモ、テナガエビ、ミズレヌマエビ |
| 情報不足   | カイエビ、チョウセンコツブムシ、タキヨコエビ、ヌカエビ               |

前回2009年のレッドリストと比較すると、淡水産エビ類（軟甲綱）の6種が追加されているが、これは新たに選定対象種群となったことによる。

ハッタミミズは、その後の調査により既知の分布域が拡大したが、生息状況は改善されておらず、またその後に生息場所の新たな圃場整備が進み、ほぼすべての生息場所で圃場整備が行われ、環境の劣化が進んだことから、絶滅危惧Ⅰ類に相当するものと判断された。

イソコモリグモについては、生息環境の劣化が進んでいるが、生息地が保全され安定して生息している場所もあることから、ランクの移動は行わなかった。

準絶滅危惧の3種のクモ類については、現状の把握が十分ではなく、ランクについては変更しなかった。  
(高橋 久)

## 文 献

### <クモ類>

- 新海 明・谷川明男・安藤昭久・池田博明・桑田隆生. 2018. CD 日本のクモ Ver. 2018.
- 高 順一郎. 1988. 白山山系のクモ類相 (1). 石川県白山自然保護センター研究報告. 15:9-14.
- 富樫一次・高 順一郎. 1988. 石川県における水田のクモ類相. ACTA ARACHNOL. . 36:121-131.
- 徳本 洋. 1990. 石川県の真正クモ類. 石川の生物. 石川県高校教育研究会: 200-207.
- 徳本 洋. 2006. 白山国立公園産真正クモ類の標高別分布. 蜘蛛. 39: 7-39. 徳本 洋. 2009. 1 石川県のクモ類相. いしかわレッドデータブック動物編 2009.

### <ミミズ類>

- 市村塘・安田作次郎. 1931. 八田蚯蚓. 石川県天然記念物調査報告 第7集. p. 42-65+ 図版 3.
- 高橋久・川原奈苗・出島大. 2012. 石川県津幡町及びかほく市におけるハッタミミズの分布. 河北潟総合研究. 15: 1-4.
- 高橋久・川原奈苗・番匠尚子. 2019. 石川県金沢市におけるハッタミミズの生息状況と生息環境の変化. 河北潟総合研究 21: 1-7.
- 渡辺弘之・南谷幸雄. 2014. ハッタミミズ (ハッタジュズイミミズ) の分布. 地域自然史と保全. 36(1): 67-76.

### <淡水産エビ類>

- 福原晴夫・永坂正夫・高野典礼・高橋 久. 2016. 内灘砂丘湧水地の水生無脊椎動物 (予報). 河北潟総合研究. 19:7-14.
- 今井正. 2012. 能登半島および能登島における淡水産小エビ類の分布. 日本生物地理学会報. 67:153-162.
- 石丸信一. 2011. 石川県における陸水性端脚類ヤマトヨコエビと新発見のタキヨコエビの採集記録. 石川県立自然史資料館研究報告. 1:37-43.
- 丸山智朗. 2017. エチゼン・能登・佐渡の河川で採集されたコエビ類. Cancer. 26: 35-42.
- 長縄秀俊. 2001. 現世の「大型鰓脚類」の分類. 陸水学会誌. 62:75-86.

# ハッタミミズ

ジュズイミミズ目 ジュズイミミズ科

*Drawida hattamimizu* Hatai

石川県カテゴリー 絶滅危惧Ⅰ類

環境省カテゴリー 準絶滅危惧

**■選定理由** 石川県河北潟周辺、滋賀県琵琶湖周辺、滋賀県余呉湖周辺、福井県三方湖周辺からのみ知られ、もともと分布が非常に限られている。現在、河北潟周辺では、河北潟の南岸から東岸の湖岸から3km程度の範囲にのみ生息している。生息環境は主に湿った水田であるが、生息範囲にあるすべての水田において圃場整備による乾田化が進み、生息場所のほぼすべてが、近年の何らかの人為的改変を受けている。また、主な生息環境である水田は、そのほとんどがトラクターによる耕耘が実施されており、機械の無い時代と比べると、生息環境が著しく悪化している。かつては1mを超える個体があったといわれるが、2014年に行われた「ハッタミミズダービー」では、河北潟の記録は75cmが最高であった。この要因として耕耘による切断が考えられる。河北潟周辺では畔に対しての除草剤散布が一般的であり、本種の生息環境を悪化させている要因のひとつと考えられる。

**■形態** 体色は青黒色。日本一長いミミズで、生きていたときは伸びた体長が60cmほどにもなる。固定標本では長さ25cmほど、太さ9mmほどである。

**■国内分布** 石川県の河北潟周辺と滋賀県の琵琶湖周辺及び余呉湖付近、滋賀県の三方湖付近に分布している。

**■県内分布** 南端は金沢市沖町で西端は金沢市直江町、東端は国道8号瀬付近、北端はかほく市鉢伏付近である。

**■生態** 湿った土壌を好むが常時水没している場所には見られない。水田の水路わき、あぜのへり付近に特に多くいるが、水のつかない所に糞塊を排出しているので、これが生息の目印として便利である。生息密度が高い田では稲刈り時期になり、水を落とすと水田中央部にも糞塊ができることがある。

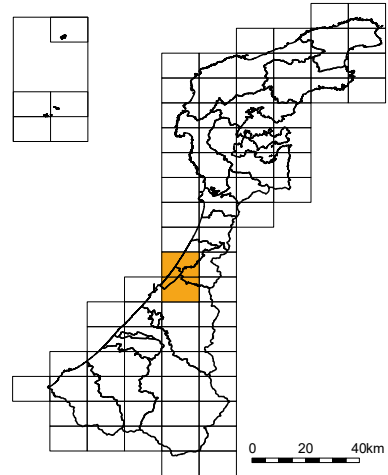
**■生息地の条件** 半湿田的環境が適しているように思われる。

**■危険要因** 水田への客土、農薬散布、水路・あぜのコンクリート化、農地の宅地・工場用地化などで生息環境は著しく悪化している。

**■参考文献** 5, 21, 22, 25, 26, 27, 28



川原奈苗



高橋 久

県内の分布

# イソコモリグモ

クモ目 コモリグモ科

*Lycosa ishikariana* (S.Saito)

石川県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類

環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類

**■選定理由** 砂浜海岸にのみ生息する大型のクモ。全国的に生息、個体数の減少が著しく、石川県では2008年の生息海岸総延長は1950年代に比べて5分の1以下になっている。

**■形態** 体長が雌23mm前後、雄19mm前後。背面は明るい灰色で数対の淡黒斑があり、腹面は全体に真っ黒。

**■国内分布** 北海道、本州。本州は日本海側では青森県から島根県まで、太平洋側では青森県から茨城県まで。

**■県内分布** 珠洲市、輪島市、志賀町、羽咋市、宝達志水町、かほく市、内灘町、白山市、加賀市。それぞれの海浜。

**■生態** 砂浜海岸の海浜植物帯およびその海側の砂裸地の乾砂地を生息域とし、砂中に縦穴を作ってその中に潜む。穴の入り口から少し奥の範囲までは穴の内面を糸で裏打ちしてあるので、穴の縁に触れても砂がくずれない点で、砂浜に存在する他の小動物の穴と容易に区別できる。大きな穴で径15mm、深さ15~20cmほど。昼間や特に夏期は穴の入り口を封鎖している場合も多いが、夜間に穴の周辺に出て周囲を通る昆虫などの小動物を捕食する。越冬期間中に卵から孵化し、卵のうから出た子グモが5月下旬ごろから穴外に現れ、分散して小さい巣穴を作る。これが成長してふたたび子グモを出すまでには2冬を経過する。

**■生息地の条件** 海浜植物帯が成立する砂浜海岸

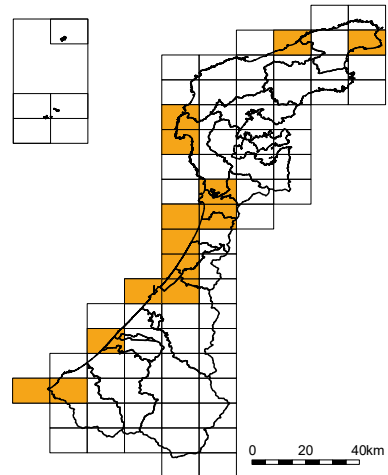
**■危険要因** 海岸線の浸食による後退、時化の大波による住居穴の流失、四輪駆動車・オフロードバイク等による住居穴の踏みつぶしなどのため、本種の生息可能海浜の消滅が激しく、生息個体数が激減している。

**■特記事項** 石川県指定希少野生動物植物種（2007年）

**■参考文献** 6, 18, 24



中川榛野



中川富男

県内の分布

その他の動物

# キシノウエトタテグモ

クモ目 トタテグモ科

*Latouchia swinhoei* (Kishida)

石川県カテゴリ 準絶滅危惧種

環境省カテゴリ 準絶滅危惧種

■**選定理由** 人の居住区域に近い所に棲んでおり、生息適地が失われやすく、全国的に減少してきている。

■**形態** 体長雌12~20mm、雄10~15mm。8眼、3爪、4肺。背甲および歩脚腿節は黒褐色、それ以外の歩脚の節はやや赤みを帯び、腹部は黒褐色ないし紫褐色で、対になった白色黄条が顕著な個体とそうでない個体がある。背甲は中央が最も幅広く、前縁中央は上方から見てやや前方に突き出る。中窩は横長で明瞭。頭部は胸部よりやや高く、目は中央に集合する。側眼は中眼より大きい。上顎が発達し、馬鋏を有し、牙溝は明瞭。雌の歩脚は歩脚毛束を欠き、先端毛束は雌雄とも欠く。

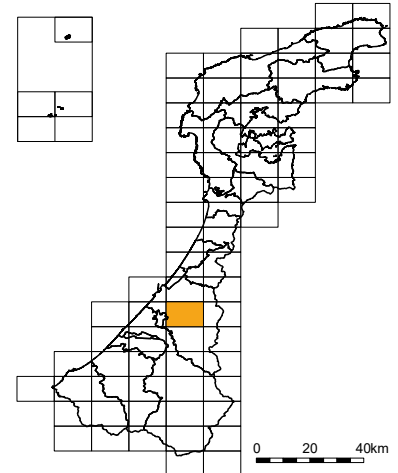
■**国内分布** 本州、四国。北限は山形県。本種をオキナワトタテグモの亜種とする説もある。

■**県内分布** 金沢市内で3ヶ所の記録があるのみ（泉野出町、兼六園、常磐町）。分布調査が不十分であり、もっと多くの分布地があると思われる。

■**生態** 社寺境内や公園の敷石のわき、家の土台石のわき、あるいは丘陵地の崖地など、比較的乾いた明るい所の地中に深さ15~20cm（メス成体）の縦穴（崖では横や斜めの穴）をほって住居としている。穴の入口に円形片開きのフタづくり、そのすぐ内側にクモがいて、付近を虫が通ると飛び出してつかまえ、穴に引きずりこんで餌とする。フタは土などを着け、カムフラージュされているので見つけにくい。雌は10年以上生きる。雄は9~11月に雌を求めて徘徊する。このクモに寄生するクモタケという菌類があり、その棍棒状をした白っぽい子実体が梅雨期に地表に現れるが、これはクモの巣の所在を知るためのよい目印となる。

■**生息地の条件** 上記のような所によくいるが、詳しい条件については不明。

■**参考文献** 3, 16, 17, 20



櫻井佳明

県内の分布

# キノボリトタテグモ

クモ目 トタテグモ科

*Conothele fragaria* (Doenitz)

石川県カテゴリ 準絶滅危惧種

環境省カテゴリ 準絶滅危惧種

■**選定理由** コケむした古木の幹上や岩上に巣をつくり生息するが、全国的に生息個体が減少しつつある。

■**形態** 体長雌10~12mm、雄8~10mm。8眼、3爪、4肺。体は黒色ないし暗紫色で、腹部背面に斑紋が無い。背甲長=背甲幅で、中央が最も幅広く、前縁中央は上方から見てやや前方に突き出る。中窩は横長で明瞭。頭部は胸部よりやや高く、目は中央に集合する。側眼は中眼より大きい。上顎が発達し、馬鋏を有し、牙溝は明瞭。雌の歩脚は歩脚毛束を欠き、先端毛束は雌雄とも欠く。下唇は胸板と境なし、胸板には一対の大きい刻印がある。

■**国内分布** 本州、四国、九州、西南諸島、伊豆諸島、小笠原父島。本州では太平洋側は茨城県、日本海側は新潟県が各既知分布北限である。

■**県内分布** 金沢市兼六園内での記録があるだけ（畑守ほか、1997）であるが、県内には未発見の生息箇所がまだいくつかあると思われる、未発表だが加賀市鹿島の森でも生息が確認されている。

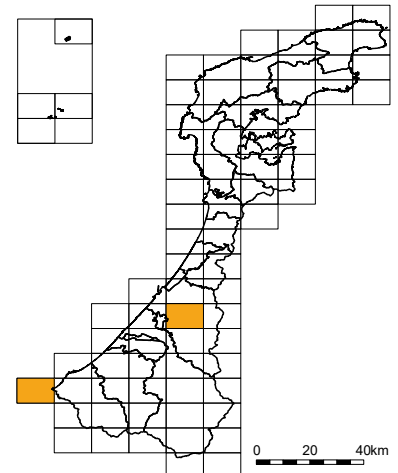
■**生態** 樹木や岩の表面にコケや樹皮くずを貼り付けた袋状の住居をつくり、入口に円形で片開きの蓋をつける。住居の入口は下向きが多い。住居の大きさは成熟した雌で径1cm、長さ3cmほどであり、切り開くとピーナッツの皮を開いた感じである。中にいるクモは付近を昆虫などの小動物が通ると飛び出して捕らえる。越冬期に調査すると、親と同居している小さな幼体、独立した幼体、亜成体、成体と、いろいろな成長段階のものが認められるため、キシノウエトタテグモと同じくかなり長い年数を生きるものと思われる。

■**生息地の条件** あまり日光の直射しない岩の壁面や古木の多い環境を好む。

■**参考文献** 1, 3, 16



櫻井佳明



櫻井佳明

県内の分布

その他の動物

# ワスレナグモ

クモ目 シグモ科

*Calommata signata* Karsch

石川県カテゴリー 準絶滅危惧種

環境省カテゴリー 準絶滅危惧種

**■選定理由** 生息密度の低い種であるが草地、芝生、公園など比較的乾燥した地中に縦穴を掘り、その中に住む。このような環境は人為破壊を受けやすいので生息適地が失われやすく、全国的に減少してきている。

**■形態** 体長雌13~18mm、雄5~8mm。8眼、3爪、4肺。雌の背甲は黄褐色ないし淡褐色で、腹部は紫褐色または灰褐色。オスの体は褐色ないし黒褐色で、雌に比べると著しく小さい。背甲長>背甲幅で、前縁は直線的だが胸部より狭い。上顎はよく発達するが牙溝が無く、馬鋏も欠く。胸板の印刻は3対でさらに不明瞭な1対がある。歩脚に末端毛束や歩脚毛束を欠き、第1歩脚は他の歩脚より細く短い。シグモ科のものに近縁で似るが、前中眼が小さいこと、下唇が胸板と完全には癒合していないこと、雌の第一歩脚がそれ以外の歩脚より矮小なことなどで区別できる。

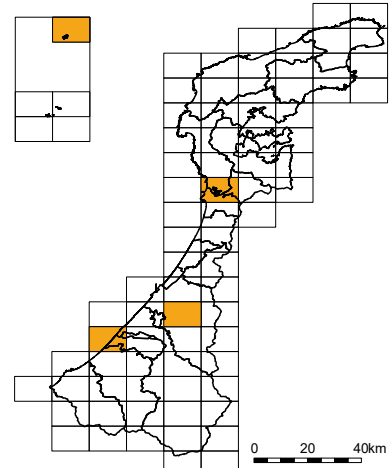
**■国内分布** 本州、四国、九州。

**■県内分布** 県内4箇所まで記録があるのみであるが、分布調査が不十分であり、もっと多くの分布地があると思われる。

**■生態** 前記のような環境の地中に深さ15~20cm（メス成体）の縦の管状の穴を掘り、その中に住む。穴の裏側は糸の膜で裏打ちされており、穴の入口にはトタゲモのようなふたはないから、このような穴を見つけることがこのクモの存在を知る重要な手段となる。穴の入口から放射状に触糸を地表に引いてあり、近くを通った虫がこの糸に触れると電光石火の速さで飛び出して長い牙をつきさして穴に引きずり込む。

**■生息地の条件** 上記のような所で見つかることが多い。比較的狭い区域から多数の住居穴が見つかる例がときどき報告されているから、穴を見つけたときは付近をよく調べてみる必要がある。

**■参考文献** 1, 16, 23



櫻井佳明

県内の分布

# テナガエビ

十脚目（エビ目）テナガエビ科

*Macrobrachium nipponense* (De haan)

石川県カテゴリー 準絶滅危惧種

環境省カテゴリー なし

**■選定理由** 潟の淡水化により減少し、湖岸や河川護岸改修によるコンクリート化、植生の変化・消失により生息場所が減少している。

**■形態** 長く発達した鋏脚をもち（いわゆる長い手のように見える）、餌をつかんで食べる。主に肉食性。

**■生態** 一部淡水域にとどまる場合もあるが、ほとんどは両側回遊を行い幼生は海や汽水域で成長し、稚エビとなって川や湖にのぼる。

**■国内分布** 日本海側では秋田県が北限

**■県内分布** 一部の河川や潟沼。河北潟や柴山潟では多産していたが減少傾向にある。

**■生息・生育環境** 川や湖沼であるが、主に汽水域や汽水につながる水域に生息する。

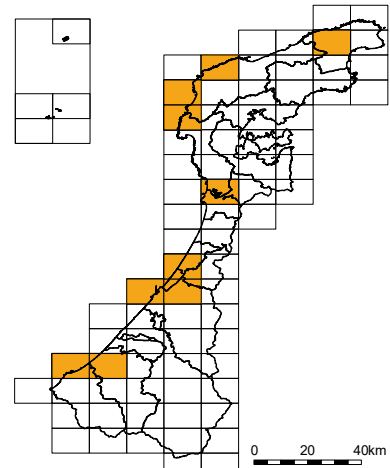
**■危険要因** 湖沼や河川の護岸化による生息環境の悪化。特に沈水植物帯の衰退。外来魚による捕食。

**■特記事項** 石川県は柴山潟で2003年より5年間本種の資源調査を行っており、標識放流調査から資源量の減少が推定されている。

**■参考文献** 8, 13, 19



川原奈苗



福原晴夫

県内の分布

その他の動物

# ミゾレヌマエビ

十脚目（エビ目）ヌマエビ科

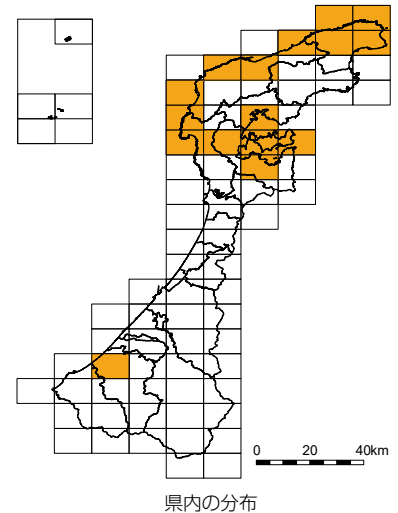
*Caridina leucosticta* Stimpson

石川県カテゴリー 準絶滅危惧種

環境省カテゴリー なし

- 選定理由 西日本に多く分布する両側回遊を行う種で、最近になって能登の一部河川での定着が知られているため。
- 形態 ヌマエビ属には眼窩上棘があるが、本種にはない。ヤマトヌマエビ（♂）の第1腹肢内肢には内突起がないが、本種にはある。ツノナガヌマエビに類似するが肛門前棘がない。
- 生態 淡水で孵化し、海に下って、再び淡水に戻る両側回遊を行う。
- 国内分布 日本海側では山口県から秋田県。
- 県内分布 能登の河川では定着した個体群が存在するとみられている。
- 生息・生育環境 河川が中心で下流域から中流域。
- 危険要因 河川や湖沼の護岸工事による生息場所の喪失。
- 特記事項 両側回遊を行う種では、海流にのった幼生が分散する過程で一時的に河川や湖沼に到着しても、寒冷地では、越冬や繁殖ができなくて死滅する機会が多いが、温暖化などで環境が変化すると、定着する個体群が出てくる。
- 参考文献 8, 11, 12

福原晴夫



県内の分布

# カイエビ

カイエビ目 カイエビ科

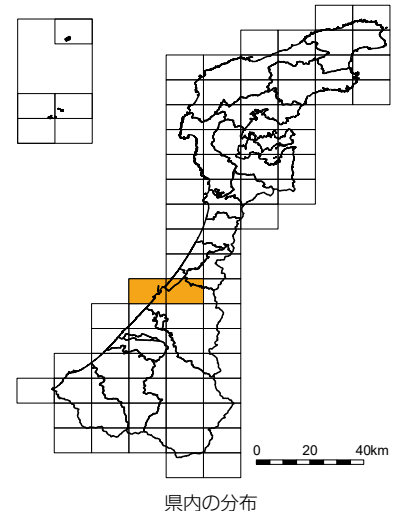
*Cyzicus gifuensis* (Ishikawa)

石川県カテゴリー 情報不足

環境省カテゴリー なし

- 選定理由 情報が少なく、石川県内では、加賀地域の水田において限られた場所で確認されているが、分布に不明な部分が多い。山形県では絶滅危惧Ⅱ類。
- 形態 二枚貝に酷似するが殻は薄く、内部にある鰓脚が透けて見える。殻の長さは5~10mm程度で、殻の中に全身が包まれてあり、複眼を持つ頭部と分節した胴体からなるが、胴体は各体節に1対の鰓脚のついた約30節からなる胸部と鰓脚のない短い腹部に分かれている。尾部は鉤状の突起となる。
- 国内分布 全国的に分布するものと思われる。
- 県内分布 加賀地域の平地で確認されている。
- 生態 水田に水が入る5~6月頃に一時的に発生する。水がない時期は休眠卵として過ごす。鰓脚で泳ぎ回り、底質中の有機物を食べているものと思われる。
- 生息地の条件 本来は乾燥地に一時的に出現する水溜が生息環境と思われるが、北陸地域では年中湿っている水田にもよく出現する。
- 危険要因 農薬散布や化学肥料の使用による影響が懸念される。
- 参考文献 29

高橋 久



県内の分布



川原奈苗

その他の動物

# チョウセンコツブムシ

等脚目 (ワラジムシ目) コツブムシ科

*Gnorimosphaeroma naktongense* Kwon & Kim

石川県カテゴリー 情報不足

環境省カテゴリー なし

■選定理由 河口の護岸によるコンクリート化、湧水地（池）の改修整備や消失による生息地の減少。

■形態 汽水域には類似種のキスイコツブムシが分布するが、本種は尾肢の外肢が長いことにより区別される。

■生態 イソコツブムシ属のほとんどが海洋性の種であるが、淡水に進出した種で、甲殻類では珍しくメスからオスに性転換をする。

■国内分布 日本海側に多く分布するが、太平洋側や東シナ海沿いでも分布が知られている。

■県内分布 県内では湧水の豊富な河川や湧水地（池）に多くみられる。

■生息・生育環境 河川の汽水域上部から淡水域、海岸沿いの湖沼や湧水地（池）に多く分布する。遊水地（池）での密度が高い。

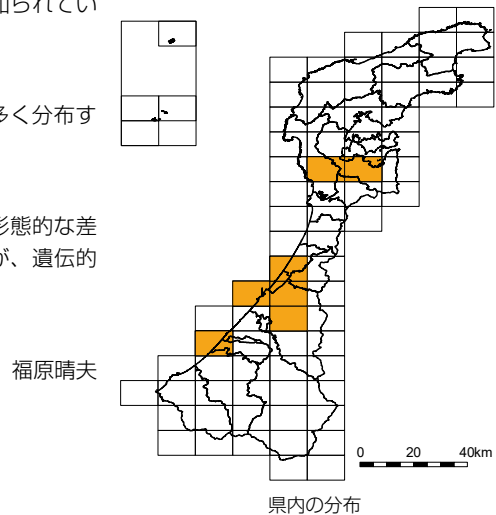
■危険要因 湧水地（池）の整備によるコンクリート化や湧水地（池）の消失。

■特記事項 酷似する種にホクリクコツブムシが報告されているが、本種との形態的な差は小さく、淡水産の出現種をチョウセンコツブムシとして扱ったが、遺伝的な解析により将来見直される可能性がある。

■参考文献 2, 14, 15



福原晴夫



# タキヨコエビ

端脚目 (ヨコエビ目) アゴナガヨコエビ科

*Sternomoera rhyaca* Kuribayashi, Mawatari & Ishimaru

石川県カテゴリー 情報不足

環境省カテゴリー なし

■選定理由 県内における出現地域が現在のところ限られている。

■形態 胸部腹板に棒状の鰓がある。近縁種のヤマトヨコエビには、第1触角第1柄節の下縁にある刺毛束の数が2本有り、本種の3本と区別される。

■生態 海岸近くの溪流や滝に生息し、海へ降って交配と産卵を行った後、抱卵した雌は川を遡る回遊性を示す。

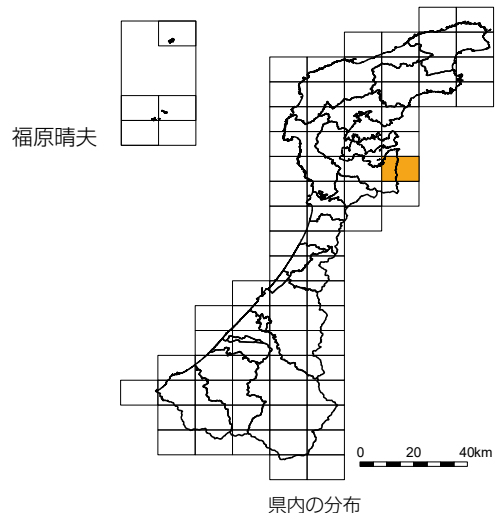
■国内分布 日本海側では北海道、青森県、秋田県、新潟県、京都府、鳥取県、北陸では石川県。

■県内分布 今のところ七尾市でのみ確認されている。

■生息・生育環境 海岸沿いの溪流や滝に生息。

■危険要因 海岸河川の改修。

■参考文献 9, 10





# ヌカエビ

十脚目（エビ目）ヌマエビ科

*Paratya compressa improvisa* Kemp

石川県カテゴリ 情報不足

環境省カテゴリ なし

■**選定理由** ヌマエビとして同定され、混同されてきた歴史があり、分布の実態が不明のため。

■**形態** ヌマエビに類似するが、ヌマエビよりも大型の卵をもつ。北方のヌカエビは頭胸甲上に棘を持たないが、日本海側には棘を有する集団もある。

■**生態** 湖沼、河川に生息し、繁茂した水草などの中にいる。

■**国内分布** 本州北部に分布する。

■**県内分布** 県内では河北潟や能登の一部河川における分布が知られており、同定が進めば他の水域に分布する可能性もある。

■**生息・生育環境** 湖沼や緩い流れの河川。

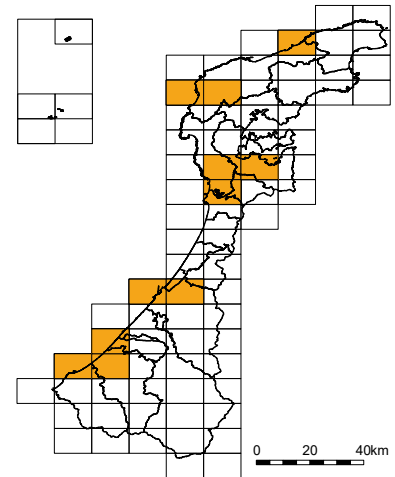
■**危険要因** 河川や湖沼の護岸工事による生息場所の喪失。

■**特記事項** ヌマエビの大卵型として知られてきたが、遺伝学的な研究から、従来のヌカエビと合わせて本種となった。頭胸甲上の棘の有無により同定されてきたヌマエビの中に、ヌカエビが存在することが明らかとなり、北陸地方のこれまでのヌマエビについても、見直しが必要となっている。見直しによりヌマエビの分布の実態についても今後明らかになるであろう。日本以外からは知られていない。

■**参考文献** 4, 7, 13



川原奈苗



県内の分布

## 参考文献一覧

- 1 千国安之輔. 2008. 写真日本クモ類大図鑑改訂版. 偕成社. 東京.
- 2 福原晴夫・岡田 昇・木村直哉. 2000. 宍道湖におけるコツプムシ科3種の分布と塩分濃度. 陸水学雑誌. 61:155-160.
- 3 畑守有紀・新海明・上田俊穂. 1997. クモタケの全国分布調査結果. Kishidaia. 72:34-47.
- 4 林 健一. 2007.ヌマエビ上科 Atyoidea De Haan, 1849. 日本産エビ類の分類と生態 II. コエビ下目(1). 114-167. 生物研究社.
- 5 市村塘・安田作次郎. 1931. 八田蚯蚓. 石川県天然記念物調査報告 第7集. p.42-65+ 図版3.
- 6 池田博明. 1988. クモ生理生態事典:121-122.
- 7 池田 実. 1999. 遺伝学的にみたヌマエビの種. 海洋と生物. 21(4):299-307.
- 8 今井 正. 2012. 能登半島および能登島における淡水産コエビ類の分布. 日本生物地理学会会報. 67:153-162.
- 9 石丸信一. 2011. 石川県における陸水性端脚類ヤマトヨコエビと新発見のタキヨコエビの採集記録. 石川県立自然史資料館研究報告. 1:37-43.
- 10 Kuribayashi, K., Mawatari, S.F. & Ishimaru, S. 1996. Taxonomic study on the genus *Sternomoera* (Crustacea: Amphipoda), with redescription of *S. japonica* (Tattersall, 1922) and description of a new species from Japan. Journal of Natural History. 30(8): 1215-1237.
- 11 丸山智朗. 2016. 本州日本海側における両側回遊性コエビ類の分布について. Cancer. 25: 55-60.
- 12 丸山智朗. 2017. 越前・能登・佐渡の河川で採集されたコエビ類. Cancer. 26: 35-42.
- 13 NPO法人河北潟湖沼研究所. 2013. 河北潟レッドデータブック. NPO法人河北潟湖沼研究所編.
- 14 Nunomura, N. 1988. On the genus *Gnorimosphaeroma* (Crustacea, Isopoda, Sphaeromatidae) in Japan with description of six new species. Bulletin of the Toyama Science Museum. 21 : 23-54.
- 15 布村 昇. 2016. 日本産等脚目甲殻類の分類. 海洋と生物. 38(5):594-599.
- 16 小野展嗣. 2009. 日本産クモ類. 東海大学出版会.
- 17 笹岡文雄. 1992. キシノウエトタゲモの寿命について. Kishidaia. 63: 31.
- 18 新海栄一. 2006. 日本のクモ. 64.
- 19 杉本 洋・五十嵐誠一. 2007. 柴山潟におけるテナガエビの生息状況調査. 平成17年度事業報告書. 142-159. 石川県水産総合センター.
- 20 鈴木成生. 1996. キシノウエトタゲモの生態(1)、(2)、(3)、(4). Kishidaia. 70: 35-56.
- 21 高橋久・川原奈苗・出島大. 2012. 石川県津幡町及びかほく市におけるハッタミズの分布. 河北潟総合研究. 15: 1-4.
- 22 高橋久・川原奈苗・番匠尚子. 2019. 石川県金沢市におけるハッタミズの生息状況と生息環境の変化. 河北潟総合研究. 21:1-7.
- 23 徳本 洋. 1990. 石川県の真正クモ類. 石川の生物. 200-207. 石川県高校教育研究会. 金沢.
- 24 徳本 洋. 2004. 石川県におけるイソコモリグモ *Lycosa ishikariana* (S.Saito, 1934) の激減. のと海洋ふれあいセンター研究報告. 10. 21-30.
- 25 上西 実. 2010. 三方湖付近の水田で採集されたハッタミズについて. 福井陸水生物会報. 17: 2-6.
- 26 渡辺弘之・南谷幸雄. 2014. ハッタミズ(ハッタジュズイミズ)の分布. 地域自然史と保全. 36(1): 67-76.
- 27 渡辺弘之. 2015. 琵琶湖ハッタミズ物語. サンライズ出版.
- 28 渡辺弘之. 2017. ハッタミズ研究 残された課題. 環動昆. 28: 23-26.
- 29 吉岡 翼. 2014. カイエビ～田んぼのエビから恐竜時代に思いを馳せて～. とやまと自然37号.